

拍動

紺野 天地

結婚が決まり、都内で両家の顔合わせをした翌日、父に会った。僕の両親は山形県に住んでいて、母は夜のうちに老犬の待つ家へ戻ったが、父は滞在を一日延ばしていた。

午後三時、梅雨晴れの石神井公園は人もまばらで、三宝寺池のベンチに並んで腰掛けると、父が懐かしそうに辺りを見回した。

「変わんねなあ、ここは」

東京で山形の訛りを聞くのは、なんだか新鮮だった。父と母は東京で出会い、結婚して石神井で暮らした。ここで、長男の僕と妹が生まれ、父の郷里である山形へ引っ越したのは僕が五歳のとき。弟の出生地は山形になる。

「お母さん、ちゃんと最終に乗れた？」

「うん。いいご両親でよかったって、嬉しそうにしてたっけよ」

顔合わせは終始、和やかだった。

父はしばらく昨日のことを話し、バッグから茶封筒を取り出した。中には入籍の手続きに必要な戸籍謄本が入っているはずだ。昨日受け取る予定だったが、ゆっくり話したいからと父が今日に延ばし、石神井公園で待ち合わせたのだった。

「それと、これ」

父が茶封筒を逆さにして、ビニールカバーのかかった小ぶりの冊子を取り出した。表紙の可愛い絵柄には見覚えがある。僕が生まれたときの母子手帳だ。

「お母さんが、続きを話して来いって。大体のことは、聞いたんだべ？」

うなづく僕の横で、父が母子手帳を広げた。

昨年の暮れのことだ。

帰省すると、例年より多い雪で仕事がずれ込んだ父は忙しくしていて、母の大掃除を僕が手伝うことになった。

古い和ダンスの小引き出しに入っていた母子手帳を見つけたのは母だった。見るかと聞かれて受け取ると、けっこうな厚みがあり、中に病院の検査結果や名刺大のコピー紙が挟んであった。僕を妊娠したとき、母が大病を患っていたのは聞いたことがあるが、大雑把な内容しか覚えていない。そのまま母に伝えると、当時の話をしてくれた。

発病したのは僕を妊娠する三年ほど前。全身性エリテマトーデスという自己免疫性疾患

で、一年近く悩まされたという。当時、公務員だった母は二年後に新任地へ転勤し、そこで仕事に追われるうち、体調を崩した。再発を疑って行った大病院で、妊娠していることを知ったそう。三十年前は治療法も限られていて、母の場合は妊娠の経過とともに病気が重症化する恐れがあった。評判のいい病院を転々として出産にこぎつけたという。

妹や弟を妊娠したときは症状がほとんど出なかったもので、僕を生んで丈夫になったんだろうと母は笑って、掃除の続きを始めた。

僕は名刺大のコピー紙をながめた。扇型の砂嵐のようなモノクロ画像は妊娠初期のものだと母は言ったが、裏に個人病院らしき名称が書いてある。大きな病院を渡り歩いたと、さっき聞いたばかりだったので、小さな違和感がわいた。あとで訊ねてみようと思ふ中、財布の中、さうい、手帳だけをタンスに戻した。だが、年末の慌ただしさの中、聞かず仕舞いだった。

僕が財布からそれを取り出すと、父は驚いた顔をした。

「そのうち返そうと思って、入れっぱなしだったんだ。この産婦人科、個人病院だよな」

本当は、春に帰省したときタンスに戻すつもりでいた。しかし、挨拶を兼ねて一緒に行った彼女が、初めて会う僕の両親と楽しそうに話しているのを見ていたら、胸のあたりが熱くなり、すっかり忘れてしまっていた。

「最初に大病院で診察して、その一週間くらいあとだな」

大病院の医師には、出産が難しいことを説かれたという。個人病院の受付で渡された問診票に、出産を希望するか否かの設問があったが、母はどちらにもマルをつけなかった。

両親は、出産を迷っていたのかもしれない。

「お母さんが診察室に入ってしまったら、看護婦さんに呼ばれて俺も中に入ったんだっけ。お腹にエコーを当てる段になって、お母さんが呼んでほしいと言ったんだ。昔のテレビみたいなモニターがあつてな、そこにお腹の中が映る。白黒の画面で何が映ってるか分かんねかったけど、一か所だけ、パカパカ点滅してた。先生がそこを指してな、これが心臓ですよ。赤ちゃん元気に動いてますって言ったんだ。そのときの画像が、これ」

僕はコピー紙を父に渡した。

「お母さん、あの瞬間、お前の声が聞こえた気がしたって言った。自分はここにいる、自分は生まれたんだって」

父はコピー紙を母子手帳に挟んで、バッグに戻した。ぼつりぼつりと二人で話しながら、三宝寺池から氷川神社へあがった。参道を下ってすぐのところ、両親と暮らしたマンションがある。神社で両手を合わせた父は、僕が顔をあげてもまだ、じつと頭をさげている。

母に伝えたかったこと

渡辺 恵子

今から五年前、母が八十五歳で他界した。納骨が終わり、誰もいなくなった実家の片付けをしていると、ノートに書き留められた、膨大な数の母の日記が見つかった。

飛ばし飛ばし読みをしていると、昭和四十五年、十月一日の文面に釘付けになった。「今日は長女の遠足の日。いつもの仕出し屋さんがお休みで私がお弁当を作ったのだが、寝過ごして、おにぎりとういんナーと玉子焼しか入れてやれなかった。それを見た長女はがっかりしたのか、少し涙ぐんでいたような気がした。恵子、ほんとにごめんね」

読んだ後、私は心の中で叫んだ。
「お母ちゃん、それは全然違うんだよ」

その時、今から半世紀以上前の、あの頃の記憶がよみがえってきた。
あれは私が小学校三年生の時だった。五月の下旬、郊外の遊園地に遠足に出かけた。

私の母は職業婦人で、当時ではまだ珍しかった。母はその年の四月から遠距離の勤務先に配属され、毎朝六時には家を出ていた。

近所に早朝にお弁当を間に合わせてくれる仕出し屋があって、その日の私のお弁当は、二段に重ねられた折箱で、そのお店の名前が大きく印字された包装紙で巻かれていた。

お昼の時間が来て、木蔭で友だちと輪になって座った。折箱の蓋を開けると、白鳥に型取られた人参が目に飛び込んできた。まるで芸術作品のようなお料理に、周りの友だちが興味津々で眺めていた。でも私には温もりが全然感じられなくて、自分だけみんなと違うお弁当に、正直ちつとも嬉しくなかった。

その時突然、隣にいた友だちが私に言った。

「恵子ちゃんのお母さん、お弁当作ってくれないの？ かわいそう……」

私は「かわいそう」という言葉に、すごく動揺した。自分がクラスメートから同情されるなんて、子どもとは言え、私にとっては、耐えがたい屈辱だった。この持って行き場のない感情の矛先が、いつの間にか母に向かっていた。

「お母さん、どうして私だけ手作りのお弁当じゃないの？ お母さんのせいで、私が今、どんなに悲しい思いをしているのか、わからないの？」

私は味の感じられない冷たい仕出し弁当をお箸でつつきながら、母への不満がどんどん湧き上がっていった。

私はその夜、帰宅したばかりの母のもとへ飛んで行った。

「今日のお弁当だけど」と、言いかけたら、母は満面の笑顔で私を見た。

「手の込んだお弁当を作る時間がないから、お詫びに今日は、豪華版を奮発したのよ」
母の言葉に、私は次のセリフをぐっと飲み込んでしまった。

四年生の遠足の時も、同じ仕出し屋さんのものだった。バスに酔って気分が悪いからと嘘をついて、私はリュックからお弁当を出さなかった。後ろめたかったが、帰り道に公園のゴミ箱に捨てた。

それから一年が過ぎ、五年生の遠足の日を迎えた。この日が、母の日記に綴られていた昭和四十五年の十月一日だった。

私は早朝に、一階から聞こえる物音で目が覚めた。降りていくと、母が外出着の上に、エプロンをかけて、おにぎりを作っていた。食卓に置かれたお弁当箱の中には、玉子焼きと炒めたばかりのウインナーが、湯気を立てていた。

私は急に泣きそうになり、鼻の奥がキューンとなってきた。

私の気配に気付いた母は申し訳なさそうに言った。

「ごめん。今日は、仕出し屋さんの定休日」

「あっ、そうなの」

何か喋ると涙が溢れてきそうで、私は自分の気持ちを素直に表現できないでいた。

その日、私は一番にお弁当箱の蓋を開けた。黄身と白身が分離した、まだら模様の玉子焼き。タコに見えるようにと、縦八つに切り込みが入れられたウインナーは、急いでいたのか、足がちぎれていたり太いのや細いのもあった。

そして丸か三角かわからない、へんてこな形のおにぎり。でもあの時に食べたお弁当は、最高に美味しかった。

私のその思いを、母に伝えられないまま、長い長い歳月が流れた。そして自分も母という立場になってから何十年も経った今、あの時の母の気持ち痛みほどわかる。

私はそっと日記帳を閉じて、仏壇の母の位牌に向かって手を合わせた。

「お母ちゃんが私のためにわざわざ手配してくれた高価なお弁当、実は捨てちゃってたの。お母ちゃんの深い思いやりに気付けなくて、本当にごめんね。」

あの日は、お母ちゃんの手作りのお弁当を持って行けるのが嬉しくて涙が出そうになっていたの。お母ちゃん、聞こえてる？ あの日のお弁当は、今までで一番美味しかったよ」

Bじいちゃんに教えられたこと

菊地 ヒロセ

アートは無駄とかいう意見を聞くたびに、悲しくなってしまう。美術や文学、本、そして一杯のコーヒー。そういうささやかなものこそ、かけがえのないものなのに。それを教えてくれたのは、Bじいちゃんだった。

Bじいちゃんは、わたしが京都の美大生だったころにアルバイトをしていたコーヒー店の、常連客だった。早朝のコーヒー店の常連客はみんな個性的で、彼らにはアルバイトの間だけに通じる名前がついていた。Bじいちゃんはその名前になったのは、毎朝決まってBモーニングを注文するからだだった。

新入りは最初にBじいちゃんの洗礼を受ける。Bじいちゃんには読む新聞、座る席、トーストの焼き加減などいたるところにこだわりがあって、その通りになっていないと叱られるのだ。最初は腹も立ったが、そのうちにコツがわかってきた。

毎朝Bじいちゃんが現れる頃を見計らって、あらかじめキープしておいた京都新聞を手渡し、オーダーを通す。決まった位置に氷なしの水、灰皿、ナイフとフォークをセットする。焼き目をつけないバタートースト、コーヒーにフレッシュ2つ、ゆで卵。Bじいちゃんはトーストをナイフとフォークで器用に挟んで食べる。砂糖とミルクをたっぷり入れたコーヒーとともに。

すべてがうまくいくと、Bじいちゃんはお釣りの小銭をチップとしてくれた。断つても受け取ってくれないので、わたしはその小銭を、下宿先のコーヒー缶に貯めていた。

ある日、バイトのひとりが「Bじいちゃんがどこに住んでいるのかつけよう」と言い出した。冗談だと思っていたら、新入りバイトのYくんがほんとうにつけて行ったらしい。

Yくんによると、Bじいちゃんは近くのバス停から、京都市内の北半分を巡回する204系統のバスに乗ったそうだ。銀閣寺から丸太町通を通って北野天満宮、金閣寺からまた銀閣寺へ、バスはぐるぐると同じ路線を回る。「Bじいちゃん、バスで2周したんですよ。それから降りてついていったら、老人介護施設に入っていたんです」

おもしろがって聞いていたアルバイトたちが、しん、となった。バスで2周したというのが切なかった。お元気でかくしゃくとされていたから、近所でご家族といっしょに暮らされているものとはかき思っていた。

「Bじいちゃん、毎朝コーヒーを飲むのが楽しみなのかもね」わたしは言った。

「そうやな、せめてこの店ではBじいちゃんのしたい通りにしといたろな」

それからわたしたちバイトはますます、素晴らしい連携プレーによってBじいちゃんの要求に答えるようになった。京都新聞はキープされ、オーダーを通さなくても厨房担当は準備をはじめ、ただちに焼き目をつけないトーストとゆで卵、コーヒーが用意される。すべてを手際よく定位置にセットしていると、Bじいちゃんが満面の笑顔でわたしに言った。「あなたはよう、知ってくれとる」

わたしはうれしかった。褒められたこともそうだが、この一杯のコーヒーでよい時間をすごして欲しいと思うわたしたちの仕事が、認められた瞬間でもあったからだ。

あれから数十年たち、わたしはいま、美術館付属の図書館で働いている。図書館には多くのお年寄りが来られる。最初は服に食べ物シミがつき、ズボンからはシャツがはみ出し、自分の名前もよくわからないようなおじいさんも、しばらく図書館にきて画集などを見られているうちに、どんどんしゅんとされてくる。身だしなみが整い、背筋が伸びてくる。でも時々、忘れ物をしたり、自分がどこに座ればいいのかがわからなくなる。そんなときはそつとおじいさんのお気に入りの美術雑誌の近くの席にご案内する。シルバークートや帽子などの持ち物をそれとなく把握し、他のスタッフとも共有しておく。誰かが「知っている」ということが大事なのだと思う。

しばらくすると、そのおじいさんは図書館に姿を見せなくなった。最後にお会いしたときも、身だしなみはきちんとされ、静かに美術雑誌を読まれていた。最後のひとときに美術がそばにあったこと、そしてそのささやかな時間のお手伝いができてよかったと思う。

アートや文学、本、一杯のコーヒー。それらは決して無駄なものではない。人生に寄り添い、自分を知ってくれている親しい存在なのだ。わたしは彼らが思う存分それらのそばにいられるように、さりげなく手助けをする。たとえ誰かに無駄だと思われても、わたしは自分の仕事に誇りをもっていい。それをBじいちゃんは教えてくれた。

Bじいちゃんにもらったチップは、コーヒー缶に入れたまま、今も使えずにわたしの家にある。

天国からの贈り物

赤松 恵

「結婚してから五十年間、お父さんとは一度も喧嘩したことなかったなあ。」

祖母はこの話になるといつも、まるで少女のように無垢な笑顔を見せる。祖母と話しながら何気なく隣の仏壇に目を向けると、見覚えのない、美しい湯呑みが置かれていた。黒地に色彩豊かな花々がちりばめられ、その花びらは金で縁取りされている。祖母のいるテーブルの上には、同じ柄の湯呑みがある。仏壇の湯呑みよりも一回り小さいことから、どうやら新しく買った夫婦湯呑みだろうと思った。

「若い頃、お父さんと約束したんよ。いつか二人きりで北陸に旅して、おそろいの九谷焼の湯呑みを選ぼうねって。結局、五十年も連れ添ったのに、一度も二人きりで旅行に行かれへんかったなあ。」

少し寂しそうな祖母の優しい横顔は、亡き祖父への追慕の情で満ちていた。

祖母は私に、六冊の古いノートを手渡した。

「もう誰にも見せんとこうと思ってたけど、おばあちゃんが天国に行ったら、棺にこのノートを収めてほしいんよ。」

それは、祖母が若かりし頃に祖父と交わした「交換日記」だった。そこには、私の知らない祖母の青春時代が、あたたかい言葉の数々でつづられていた。

遠距離恋愛だった祖父母は、様々な困難を乗り越えた末に結婚した。六冊のノートは、携帯電話もない時代に、離れて暮らす二人にとっての心の拠り所だったに違いない。互いを大切に想う気持ちから、他愛もない出来事ひとつ、この日記帳にしたためては、会うたびに一冊ずつ交換する決まりだったそうさ。

日記帳の祖父の言葉に、「なかなか逢うことのできない二人が、時間を気にせずに過ごせる場所があれば、どんなに幸せなことか」と記されたページがあった。年老いてからも、祖母を大切に、愛おしそうに見つめる祖父の穏やかなまなざしを思い出し、急にあふれた涙が、ほほを伝って流れた。

祖父が亡くなって四年経つが、言葉によって紡がれた祖父の愛情は、確かに今でも祖母の心に生き続けている。あまり多くを語らない祖父だったが、亡くなって初めて、愛情深く、一度決めたことを貫ける、とても一途な人間だったと気付かされた。

祖父の亡き後、遺影に向かって座り、ひとりで肩を震わせながら涙を流す祖母の背中が、

とても小さく見えた。祖父は亡くなるまでの数か月間、ずっと入院していた。毎日懸命に看病した祖母だったが、ひとつだけ後悔していることがあると私に話した。それは、祖父が亡くなる前日、入院していた病室を出るときに、「バイバイ」と言ってしまったことだそうだ。毎日、いつ別れの日が来ても後悔しないように、祖母が病院から帰るときは「お父さん、またね。」と祖父に声をかけることに決めていたのは、私も知っていた。しかし、祖母が「お父さん、バイバイ。」と伝えて帰った日の夜中、祖父はひとり病室で、静かに、そして穏やかに最期の時を迎えた。

「あの日、なんでバイバイって言うたんやろう。まさかあの日が最期になるなんて。」と何度も後悔する祖母は、悲しみのあまり壊れてしまいそうなほどに、毎日涙を流した。けれど、悲しみの底にいる祖母の心の支えとなったのは、あの「交換日記」だった。六冊のノートを何度も読み返しては、若かりし頃の祖父との思い出を振り返った。そうして、祖母は次第に生きる希望を取り戻していった。

そしてこの春、叶わなかったはずの祖父母の約束が、思いもよらず、五十年越しに叶うことになった。私の叔父夫婦が北陸に旅をし、偶然選んで祖母に贈ったのは、なんと九谷焼の夫婦湯呑みだった。祖父母がいつか訪れたいと願っていたことなど、叔父夫婦でさえ何も知らなかったのだから、これは亡くなった祖父の「はからい」なのかもしれない。

「お父さん、よっぽど北陸に行きたかったんやね。ありがとう、あんな昔のことやのに覚えていてくれて。お父さんのことはいつまでも、忘れへんからね。」

祖母はそう言って、そっと手を合わせた。

六冊の「交換日記」によってつながった、五十年前の祖父母の約束。そこには、報われないう無常の出来事でさえも、全て優しさで包み込んでしまうような、不思議な力がある。たとえ叶わないと思う願いでも、その願いに心を込めることにこそ意味があるのだろう。

仏壇に向かう祖母は、もう悲しみに打ちひしがれてはいない。時間の流れとともに、愛する夫の死を少しずつ受け入れ、深い悲しみの中に、生きる喜びを見つけ出している。

日記帳のページをひとつめくると、「倅せな日々を暮すことが出来る 一生が短く思えて（百才まで健在でも）、次の世代も、その次も、二人一緒にどこまでも居りたく思います。」と、達筆な祖父の字で、丁寧に書かれていた。

仏壇とテーブルに置かれた「九谷焼の夫婦湯呑み」は、どこか誇らしげに輝いていた。

親父とトンテキ

井島 克也

第2の軍艦島をご存知だろうか。長崎市沖の軍艦島から北へ25キロ。九州最後の炭坑の島。西に五島列島を望み、大きな夕陽が溶けるように東シナ海へと沈む。周囲4キロしかない島内に、70棟もの鉄筋コンクリートのアパート群。1970年代の最盛期には約7000人が賑やかに生活していた。現在はアパートも炭坑施設も廃墟と化し、波の音と風の音だけが哀しく流れている。

炭坑は24時間操業。親父たちは、週単位で早出・遅出・夜勤の3交替制で働いていた。3番方と言われる夜勤の時は夜9時に出勤する。昼間は襖一枚隣の部屋で寝ており、私たち子供3人は親父を起こさないように、外で遊ぶかテレビのポリウムを抑えて静かに過ごしていた。晩御飯時になると襖が開いて、肌着にステテコ姿でハイライトを一服。

「かつや、ビール。」

冷蔵庫から大瓶のキリンビールを出して、栓を開けて卓袱台に。仕事前でも必ず1本。手酌でコップに注ぐと、まるで麦茶かのように一気に飲み干す。2杯目を注ぎながら、

「お前も飲むか？」

冗談を言う顔でもなく、私のコップにちよつとだけ入れてくれた。ご飯の支度をする母親が睨んでいるのを気付かないふりして、恐る恐る一口飲む。

「ニガッ！」

と言うと、親父が一瞬だけニカッと笑う。

親父との会話なんてめったにない。テストで100点とっても、運動会の徒競走で一番になっても褒められたことはない。2つ上の兄と喧嘩して、私が兄をぶん投げた時、おもいきり叩かれた。兄が弟相手に手加減していたのに、それに気付かない私を親父が許さなかった。3兄妹に手を挙げたのはこの時だけなので、強烈なインパクトで私の体の中に残っている。

そんな親父だが、晩御飯の時、それも好物メニューの時に上機嫌となる。何せ鹿児島の家が海岸まで歩いて10秒というだけに、刺身にはうるさい。釣り好きの仲間から釣ってきたばかりの鰹が届くと、

「刺身は鰹が一番旨か。」

美味しそうにビールを流し込む。

「おいもいっちょよかね？」

と横から箸を伸ばしても、無言のOK。

井島家の最大の盛り上がりメニューは『トンテキ』だった。母親が市場のお肉屋さんで、トンテキ用の肉を12枚買ってくる。そんな客は珍しいらしく、

「あんたんとこ、何人で食べると？」

とあきれられていた。母親がフライパンを振りながら、

「何枚食べるとね？」

「2枚！」「おいは3枚！」

兄弟で競うように申告する。家のご飯でナイフとフォークを使うのもこの時だけ。ご馳走感満載で、子供たちのテンションも最高潮に。ステテコ姿の親父がフォークの背にライスを乗せて、慣れている風に食べて見せる光景は、カッコよくもあり、おかしくもあった。ステークソースなんて当時の島にあるわけがない。ウスターソースをたっぷり、特に兄の皿はソースの海と化していた。(還暦過ぎた今も変わらんらしい。身体に良うなかばい。)

親父の皿にも2枚。ビールを飲みながらなので、みんなよりペースが遅い。1枚を食べ終えたところに、私の脂身部分を切り離していたのを、親父の皿へこそっと移す。小学生には脂身のジュワツとくるのが無理だった。

「こいが旨かとに。」

嬉しそうに食べてくれた。

20年前の桜が散る頃に70歳で逝った。がんとの闘いは3年にわたった。最後の正月を自宅で過ごすことになり、子供3家族が集まった。座椅子に身をあずけながら、5人の孫たちが遊ぶのを嬉しそうに眺めていた。そして私たちに少ししゃがれた声で、

「なあ、兄妹は仲良うせんぼぞ。」

これが親父の遺言であり、私が聞いた最後の肉声となった。

口数少ない親父が、晩御飯の時だけ機嫌が良かった理由がなんとなく判ってきた。

『家族が揃って、仲良く元気にしている。』

単純にこれだったのではないか。日常の当たり前のシーンに思えるが、今の我が家では、義母以外は仕事に出ており、家族全員で食卓を囲めるのは、年に数えるほどしかない。

そんな我が家の『トンテキ』は私の担当。焼きたてを美味しく食べてもらうために、誰かが帰宅するたび2度・3度とキッチンに立つ。さすがにソースの海ではなく、デミグラスソースや、葱を刻んで塩とゴマ油で和える手作りソースで反応をうかがう。

「うん、旨い！」

もう大人になった子供から脂身の提供はなくなったが、笑顔でナイフ&フォークを動かす姿を見ている私は、頭髮も同じように薄くなり、だんだんと親父の年齢に近づいている。